

オーストラリアにおける大学の財政と外国人

人文学部教授 岡野 ひさの

2006年9月から2007年8月まで在外研究員としてオーストラリアのモナシュ大学日本研究所において研究に専念させていただいた。以下、その間に遭遇した研究とお金に纏わる経験、およびその中で外国人が果たす役割に関して書くことにする。

1. 研究機関とその財政

2005年9月末、日本研究所に1年間の滞在を希望する旨を伝えると、A4一枚に研究計画を書いて送るようにと連絡が来た。それは、研究テーマ、研究目的、研究活動、研究期間の4項目に分かれており、研究目的には(Please summarize what you intend to achieve by carrying out the proposed research. This should describe the goal of the project, and not the activities themselves.)と、研究活動には(Please describe the overall research activities.)と括弧付きの説明が加えられていた。しかし、忙しかったことも手伝い、私はあまり考えもせず、適当に書いて送ってしまった。

12月に入ると、私が「研究所の運営委員会において、日本研究所の客員研究員として承認された」と書かれた所長からの招聘状とともに、「査読つき研究雑誌への投稿予定あるいは本の出版予定を含む、具体的な研究計画を再度提出すること」、および「最近の研究業績2・3点あるいは最新の出版物を送付すること」という連絡が入った。

福岡大学に対しても在外研究中の研究計画等を提出する義務があったが、福岡大学は在外研

究中も給料を支払ううえに、在外研究の手当てまでも支給するのであるから、それは当然である。しかし、モナシュ大学日本研究所からは、「研究所共同研究室使用料・コンピュータアカウント使用料・図書館使用料などとして、滞在6ヶ月までA\$500(約50,000円弱)、1年まではA\$1,000(約100,000円弱)を支払うように」との連絡を9月段階で受けていた。この点については12月に送られた所長からの招聘状にも明記されている。このような状況下で、なぜ客員研究員までに研究成果を強く要求するのか奇異に思い、その理由を尋ねると、以下のような答えが返ってきた。

The Japanese Studies Centre is a research centre within Monash University. As such over recent years its budget increasingly has come to depend upon its research output or productivity. Accordingly, the Centre needs to be more concerned with, and accountable for, the research activity of those appointed to the centre.

つまり、所属する研究者の研究成果によって、その機関の財政が決まるのである。これは付属の研究所に限られたことではなく、大学の学部等においても同様で、それぞれ研究成果を出すことに粉骨砕身している様子が窺えた。

前述の諸使用料に関してさらに言うと、すでに述べたように招聘状を受け取った2005年12月には「滞在6ヶ月までA\$500、1年までA\$1,000」であったが、在外研究開始直前の2006年8月には「滞在6ヶ月までA\$1,000、1年

までA \$ 17,000」と一年間では1.7倍に跳ね上がっていた。ただし新料金に関しては、以下の一文が付加されていた。In some cases, involving extremely active researchers, the fee may be remitted. もちろん私は6ヶ月経過した時点で、所長のサイン入り招聘状に旧料金が記載されていること、および雑誌に論文掲載が決定していたことを理由に、滞在期間後半の料金免除を交渉し、一年間の滞在であってもA \$ 1,000しか支払わなかった。

研究成果の報告は毎年3月とのことで、帰国後モナシュ大学にサイン入りの書類を提出しなければならなかった。前述した諸使用料A \$ 1,000に加えて、これによっても私はモナシュ大学日本研究所に対して財政的貢献をしたことになる。

研究機関であるなら、所属研究者の研究成果によってその機関が査定されるのは当然であろう。しかし、研究成果を出すのに必要な期間は1年で十分であろうか。目先の成果を出すために、研究自体が浅薄なものになりはしないか。成果主義に陥ったために、倫理的な問題が起こりはしないか。

実際オーストラリアでは様々な学会が林立し、査読付きの学会誌といえども価値ある論文は少ないと話す知人もいた。また所長の手紙によれば、大学内で調査等をする場合、大学からの倫理的許可が必要で、その許可を得るのに3ヶ月程度かかることもあるという。

日本においても国立大学独立行政法人化などの動きに見られるように、大学の財政的な状況は変わりつつある。日本という国の財政が逼迫しているのであるから、当然と言えば当然であろうが、日本の大学が進もうとしている先にあるのは、オーストラリアのような形なのだろうか。色々と考えさせられた。

2. 外国人留学生

オーストラリアの大学で学ぶ場合、外国人学生の授業料は割高になる。例えばモナシュ大学の人文学部で言語を専攻する場合、学部留学生は約1.3倍の授業料を払わなければならない。オーストラリアの大学は、外国人の客員研究員にも財政的寄与を要求すると同様に、外国人留学生にも財政的寄与を要求しているのである。

さきほど、「日本の大学が進もうとしている先にあるのは、オーストラリアのような形なのだろうか」と述べたが、私が経験した財政的寄与や外国人学生に財政的負担を課すことは、日本の大学では難しいであろう。それは、ある程度の財政的負担を負って日本で留学したり研究したりする人が、世界にどの程度いるかという問題でもある。

外国の大学で学ぼうとするとき、何を学べるかが最も優先されるであろうが、留学先を選ぶ基準はそれだけに限らない。そこで生活するのであるから、色々な意味での生活のしやすさやそこで生活することによって得られるものも、選ぶ基準になってくる。その点において、日本でしか通用しない日本語と、世界的に通用する英語という言語の違いも厳然と存在する。外国人に対する日本語教育を行っている私にとっては、暗澹たる気持ちになる事実でもある。

Harvard University で過ごした一年

～ 研究と教育、交流を通じて感じたこと～

理学部准教授 香野 淳

2007年3月から1年間、長期在外研究の機会をいただき、米国・Harvard University で研究活動を行った。滞在期間中の出来事、人々との交流を通じて感じたことを書いてみたい。

1. Harvard University のこと

Harvard Univ.は Faculty、School など構成されるとも大きな組織である。日本との違いもあり、運営の仕組みなどはなかなか分からない。興味ある方はまずは大学ホームページをご覧頂ければと思う[1]。私の所属は、Harvard School of Engineering and Applied Sciences (以下、HSEAS)[2]であった。HSEASは2007年に旧 Division から新しく独立し、School となった。夏には式典やシンポジウムが開催され、私も一員として諸行事に出席した。科学の未来、環境や生命などについて考える貴重な機会となった。時の巡り合わせに深く感謝している。

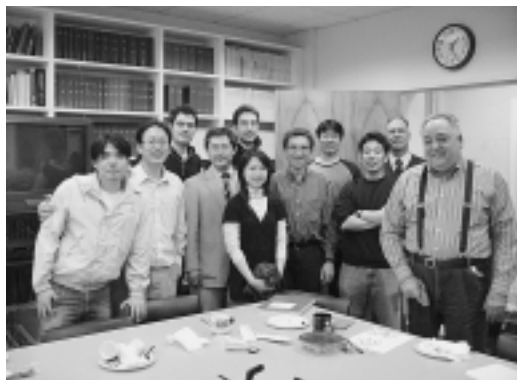
新緑眩しい6月のキャンパス(Harvard Yard)では Commencement が開催された[3]。356回目の卒業式。この時期の Yard は華やかで誇らしい雰囲気にも包まれた。式典は Yard 内の芝生地で行われ、式の時間帯は許可された者以外は立ち入り禁止となる。卒業式の模様はケーブル TV で中継、インターネットでも配信される。私にはこれだけでも驚きだった。

Commencement にはその年の卒業生と父母以外に、Alumni が参加し、社会に貢献してきた既卒者数名に対して名誉博士号が授与される。

この年は Microsoft 社長のビル・ゲイツ (Bill Gates) 氏にも名誉博士号が授与された(ゲイツ氏は卒業していなかった)。大学への愛着と誇りを胸に社会で活躍する卒業生と大学との絆。在校生、教職員だけでなく、卒業生がずっと大学の一員であることを強く感じた。

Harvard Univ.には、莫大な蔵書とデータベースを有する図書館、名画や逸品がある美術館、貴重な展示物のある博物館などがある[1]。どれも一大学の持ち物としては驚異的である。卒業生による寄付・寄贈が相当あることは容易に想像がつく。卒業生は陽に陰に大学を支えてくれる大学の一員なのだ。

大学には外国から来た学生、職員などを支援する International Office という組織がある。ビザ、保険、税金等々、まずはここに相談すればよい。また、大学関係者と家族のための Harvard Neighbors という会がある。英語教室、手芸教室など幾つもの教室に参加できる他、ワインテスティングなどのイベントもあり、たくさんの出会いがある。Neighbors には100年以上の歴史があり、会は職員や家族のボランティアで運営され、大学は Neighbors にキャンパス内の建物を提供している。外国から来た人々が楽しく安心して暮らせるように支えるコミュニティとそれを支援する大学。真の「国際化」とは何か、あらためて考えさせられた。



送別会での Materials Science Group の写真（一部）

2 . 研究と教育のこと

マイケル・アジズ (Michael J. Aziz) 教授の協力、指導のもと、Materials Science Group [4] に所属し (写真) 固体物質の基礎物性と光学的応用、及びナノ構造物質の物性研究を行った。研究を進める中で、国際共同研究の素晴らしさと難しさの両方を経験した。

グループでは少なくとも週 1 回はミーティングが行われる。私も毎回報告を行い、議論・討論に参加して楽しんだ。他グループとのジョイントミーティングも多い。研究者として対等の立場でいつでもどこでも議論ができる。在外期間中に幾つかの成果を上げたことは幸いであったが、それ以上に、議論・討論を通じて彼らの考え方を学び、自分の考えを深める機会を持ったことが何より幸いであった。

HSEAS では 2 回の講演を行い、学部生と大学院生を指導する機会にも恵まれた。Harvard には学部生が研究の現場で学ぶプログラムがあり、私たちの研究室にも学部 2 年次生がやってきた。いかに優秀な学生とは言え、指導は大変である。アジズ教授の忍耐と努力には敬服した。

学生は、毎回の講義で出される難しいホームワークをクリアしなくてはならない。必死で勉強するし、そのため図書館も深夜まで利用できる。そして、ここで欠かせないのが TA のシス

テムだ。TA の大学院生は講義中の補助の他、オフィスアワーを指定して学生からの難しい質問に答えなくてはならない。毎回質問に来るので、TA の大学院生にとってもかなり勉強になる。

Harvard Univ. は入学するのも難しく、卒業するのも難しい。国内外から来た学生が相当な勉強をして社会に出て行く。福大の学生も社会に出れば、直接・間接に彼らと競争することになる。福大の学生諸君が世界に目を向け、一層勉学にも励んでくれるよう、私の見たこと感じた事を伝えていきたい。

3 . Boston・Cambridge と生活のこと

生活の拠点は、Boston の隣、Harvard Univ. や MIT のある Cambridge 市においた。Boston や Cambridge は住宅価格やアパート賃貸料がとても高い。私は、これまで住んだ中で最も狭い部屋に最も高い家賃を払って住むことになった。しかし、Cambridge/Harvard は学生の街の雰囲気があり、私はとても好きだった。安くて美味しい各国の料理を求めて小さなレストランを回るのは楽しみの一つだった。

Boston は都会ではあるけれど、歴史があり、落ち着いた雰囲気のきれいな街である。紅葉が美しいことでも知られる。車で一時間ほどの圏内には、Plymouth、Lexington、Concord などアメリカ史に残る場所がたくさんある。

冬はとても寒く、零下 20 度くらいになる日もある。暖かくなってくると、みんな屋外で季節を楽しむようになる。食事も屋外テーブルでとることが多くなる。ベイエリア、チャールズ河畔などでは、心地よい光と風の中でゆったりとした休日を過ごすことができる。街角では様々なイベントが行われ、それぞれに特徴があっても楽しい。身近にある景色や雰囲気を楽しむ生活はとても素敵だった。

Bostonian (ボストンっ子) はスポーツに熱

狂する。野球、バスケット、ホッケー、アメフト。松坂選手・岡島選手の活躍もあって Red Sox が World Series で Champion になったことも大きな思い出。Fenway 球場の雰囲気と熱狂がとても懐かしい。

New England の突き抜けるような青い空と心地よい透き通る風を感じながら過ごした一年。自分が忘れていた何か、大切な感覚を取り戻したように感じている。

末筆になりましたが、在外研究の機会を与えて下さった福岡大学の関係の方々、国内外でサポートして下さった方々に心から感謝致します。

参考

- [1] <http://www.harvard.edu/>
- [2] <http://www.seas.harvard.edu/>
- [3] <http://www.commencement.harvard.edu/>
- [4] <http://www.seas.harvard.edu/matsci/>

